

ある大学の先生との会話の中で、福祉施設に就職した卒業生たちが異口同音に「入職から数か月経つが、現場で何も教えてもらってない」と言うのですが、実際はどうなのでしょう—と問われたことがあります。その場に居た数人の施設長は「いや、今の若い人はここを教えてくださいなどと質問してこない。何故なのだろう。それが悩みです」と応じ、支援のありがた、そして良い支援者であるには等々最近の懸案を話し合いました。ただ「自分たちの頃は」とつい前置く癖は抜けませんでした。

年々現場に難しい課題が多くなっていること、その反面、現場に余力がなくなっているという危惧もあること、そういう中で、世代間で相互に感じるギャップをどう越えればいいのか、私は差し迫った問題だと考えました。支援には求められることに応えていくという側面があり、その問題を解決するには、柔軟にそして支援者全体で力を合わせて対応をしなければならないことが多くあるからです。

「今から振り返ると4月はどうやって仕事していたのかあまり思い出せない」と若い職員が述懐したことがあります。入ったばかりは夢中で、とにかく全力で仕事に向き合ったということだとわかります。学生時代とは違って常に神経を張り巡らせ、身体もフル稼働だったのです。この若い職員の頑張りも見事だと感じます。

管理職世代が、自分たちの成功体験をその時代固有の背景抜きに語ることは注意しなければなりません。若い世代の職員にはそれもヒントにして、どんな仕事をしていきたいのかを現場の困難課題へ立ち向かう中で発見し、開拓して欲しいと思います。良い芽が大きく育つよう私も努めたいと思います。

(平成 27 年 5 月)